

能を切る



「四賢婦人・矢嶋楯子の生涯」

文||福永無想

第十五回 「新栄女学校」

明治11(1878)年、楯子は築地にある新栄女学校寄宿舎の舎監室に越してきた。女生徒の大半は寄宿生で、6、7歳から20歳過ぎの生徒まで三十数名ほどが学び、寄宿舎の監督や修身(道徳など)を教えることになっている。

楯子の荷物は机一脚と本箱、夜具、そして少しばかりの身の回りの物と相変わらず質素であったが、給料についてはミセス・ツルに、教師らの平均月給が7円ほどに対して10円の金額を提案した。

「それは、少し高くはありませんか…」
ためらうミセス・ツルに楯子は返した。「それに見合うお仕事をいたします。ぜひとも、やらせてくださいませんか」

儉約家の楯子が、金に困っているとは思えなかった。なのに高額な給料を求めたのには、練馬の家に預けた妙子の養育費のこともあったろう。そしてもう一つ、熊本に残した達子を引き取り養うために、安定した経済力をつけておきたかったに違いない。

築地に来てからの日々は、興味深いことばかりだった。風俗や習慣の違う西洋人と日本人との折り合いのつけ方もそうだが、なんとミセス・ツルは楯子に、聖書を教える組を預けたのだ。

キリスト教禁止令の高札が撤去されて久しかったが、いまだ人々はキリスト教なるものを恐れているところがあった。ただ、世間のように楯子がキリスト教に距離を置かなかつたのには、息子の治定が入信していたこともあっただろう。とはいえその時、聖書のなんたるかを全く理解していなかった楯子にすれば、予想だにできなかったことである。だが誰よりも向学心に燃える楯子は、聖書を心得るために教会にも通い始め、加えて従来の小学校規定を基礎に日本学科の課程も設定した。

新栄女学校に赴任してまもなくのこと、楯子のある行為について宣教師や教師らがミセス・ツルに注進した。喫煙である。聖書を読みながら煙草をふかし、訪ね来る人の前で煙を吐いた。だがこの頃、中高年の婦人たちが喫煙をたしなむのは珍しいことではなく、楯子にしても普段の嗜好にすぎなかつた。この時ミセス・ツルは、皆が嫌うことを知りつつも、おかまいなく喫煙を続ける楯子を黙って見守った。

ある日のこと、楯子は客人を見送った後

で近所をひと回りしてみた。散歩を終え舎監室に戻ろうとして、何かが焼け焦げる匂いがした。楯子が過ごす舎監室は、寄宿生らの部屋が連なる一角にある。「もしや…」と駆け出して戸を開けると、舎監室は煙で充満していた。楯子は急いで炊事の者たちと水を運び、懸命に消火にあたった。

原因は煙草の火だった。火が残っていたキセルが煙草盆から机に転げ落ちて紙が燃え、その火が畳の一部を焼いたのだ。幸いにもぼやですんだが、もしこれが夜中であつたならば、眠っている生徒らの命を危険にさらしたかもしれない、そう思うと楯子は震えが止まらなかつた。

「どんな処分でもお受けいたします。そしてこれより、煙草を絶ちます」
床に手をつき泣いて詫びる楯子に、ミセス・ツルはこう言葉をかけた。

「私こそ謝らなければなりません。これまで注意しなかつた私を許してください。神は生きておられます。あなたを改心させてくださいました」

とがめるどころか、ミセス・ツルは涙を流しながら楯子の手を取りほほ笑んだのだ。この尊くも、深い愛に満ちた精神に楯子は強く心を打たれた。そして、そんな彼女が信じる神というものを、自分も信じてみたいと思うのだった。

※この物語は、矢嶋楯子の資料をもとに描いたフィクションです
※参考文献=「矢嶋楯子伝」(徳富蘇峰・監修、久布白落実・著/不二屋書房)、「矢嶋楯子の生涯と時代の流れ」(齊藤省三・著/熊日新書)、「熊本のハンサムウーマン」(堤克彦・著/熊本出版文化会館)、「矢嶋楯子伝 われ弱ければ」(三浦綾子・著/小学館文庫)、「明治女性史」(村上信彦・著/理論社)、「まんが四賢婦人物語」(益城町)

四賢婦人記念館

益城町杉堂1250 電話/286-4959
開館/9時30分~16時30分 休館/月曜(祝日の場合は翌日)
入館料/一般・高校生200円(160円)、小中学生100円(80円)
※()は30人以上の団体割引料金

